

◇◇◇◇◇ 公教育は家庭教育に ◇◇◇◇◇

◇◇◇◇◇ どこまで関与するか (2) ◇◇◇◇◇

保育所の窓からのメッセージ

浪川美知子

学校の週五日制がスタートした九月の新聞テレビは、各地での様々なイベント紹介で賑わっていました。子ども達の土休の日は、何か特別な事でも用意しないと、とでもいうようなムードでしたが、私は、単純に、親の手元にもう一日多く戻ってくるだけなのだから、休日のベースでのんびり家庭で過ごそう、と気楽に考えていたので、マスコミの反応には少々驚きでした。週五日制実施の為、修学旅行が無くなってがっかりしている等の話は、ニュースになるでしょう。しわ寄せの出る形でしかこなせないカリキュラムの検討とか、他様々な論議を呼び考え合う材料を提供しているかもしれませんが。学校週五日制に関しては、このマスコミの報道よりは、父母グループなどの、地域の子どもの達の教育を見つめているグループのミニコミ紙の方が、より実態を把握しているし、お祭り騒ぎにせず、冷静な分析がされていました。

確かに、実施前は、多かれ少なかれ、各家庭、各地域に、戸惑いがあったらろうと思います。この時の

“戸惑い”は、何か、と考えてみると、他者に任せていた教育を、親の手に委ねられた時の戸惑いではなかったか、と思えました。（又は、各家庭の受け皿としての地域に委ねられた時の、とも言い換えられるもの）

私自身も、今年度の夏休みに、似たような体験をしました。幼児期までは、夏の遊びを大人の都合の良い日程で計画する程度でも、結構楽しめたのですが、小学校中学年になり、娘なりに選択の目も育ってきているし、大人にも、日頃伝えられないメッセージをこのチャンスに、何か伝えることができたらいいな、という欲も出てくるし、でも、一体どうやって、何を娘とすればよいのか、全く自信がありませんでした。この時、自分が仕事で忙しい事を口実に、いかに学校や学童保育に、教育という分野を依拠していたのだろうか、という事に気付かされたのです。私が親だったから私でしかない教育をするラッキーチャンスが、この夏休みだ、と思いたち、戸惑いは消えました。意気

込み次第でも状況は、違ってくるものです。

私は、何でもできる能力の持ち主ではありませんので、一人で全てをやり切ろう等と無理しない事にしました。苦手な分野は、行政の企画等を利用してもらったりもしました。

私の故郷に、ゆったりとした日程で滞在し、娘の希望や体調に合わせて、私の案内で、よく歩きました。先程の自分自身への働きかけをする前は、同じ地にきてても、自宅にいた時と同様、家事に追われ、あとは自分自身の疲れを癒すことに熱心だったので、娘の方も期待感がなくなっていました。天候に合わせて、滝めぐり、山歩きのアートの露天風呂、川魚の養殖場を森林浴しつつ散歩、雨の日の寺院や、庭園めぐりと、手近な行動だけでも、いろいろな体験ができました。休暇の関係で父親が一足先に帰ってしまっても、娘は、私の故郷での生活を、もっと続けたいと要求していました。東京とこの地との比較などもしていました。どうして、こんなに気持ちが悪く落ち着いてのんびり

できるのか、とか、こんな静かなのに、他人に遠慮で
もしているように草刈りの道具を動かして、東京
は、人がたくさんいてうるさいのに、もっと大きな音
を、遠慮しないで出し合っているのはどうしてか、と
か、空気がきれいと感じたり川が飲める位きれいで臭
くないのに、どうして東京にはないのか、毎日比較検
討して、自分なりに考えているようでした。いつのま
にか騒音に慣らされていた私達には、こわすぎる位静
かだった夜が、居心地の良いものになるのに数日かか
りました。

私という視点からは、「面倒」という文字がまず浮
かび上がってくるものも、娘の視点から見ると、新鮮
で、初々しく、心がさわやかになるものなのでした。
特に二人での生活になってからは、私と娘が互いに
相手の存在が不可欠という強い結びつきになっていき
ました。こうして娘と行動した日々の方が、実は私自
身にとっても、とても心も体も休まる日々になったの
でした。

一方、行政の企画に応募したものの一つに多摩動物
園の飼育指導があります。この時は子のみの参加だっ
たので、二時までの六時間は、本でも読んで待ってい
る覚悟で参加しました。係の方に子どもを預けると帰
る方もいました。ところが、親切な事に、子と別れた
後、大人には、シルバーボランティアの方々がガイド
に付いて下さり、朝の園内散歩としゃれこむ事になり
ました。その時の注意事項に、たとえ途中で子どもと
出会う事があっても声をかけたり世話をやいたりしな
いで下さいね、というものがあり、過干渉、過保護の
実態があるようだと感じました。待つどころか、普
段体験できない静かな朝の動物との触れ合いや、シル
バーボランティアの方々のホットな説明に、感激して
いました。それは娘に、「ありがとう」と言いたい喜
びでもありました。娘の方は、娘で、学ぶものが多々
あり、帰りは、お互いの情報交換で賑わいました。

つい子どもとつき合う事は、私に犠牲を強いること
でもあると思っていたけれど、実は娘によって、より

豊かに生かされているのではないかと気付かされた夏休みの体験でした。やはり、体験してわかる事もあるのです。

仕方無しにはなく、喜んで積極的に“親業”してみる事から、生き生きと息づいてくるものがあるようです。そういえば、『大草原の小さな家』という本の中に、すてきな家族が登場しますが、学校は生活の一部であり、大人は、学校では教えられない、労働を、近隣の人々との付き合いを、人生を…と教えていきます。私達もその親の姿を受け継いでいきたい、と思いました。

最近行政サイドから、育児に疲れたり、親の余暇を保障する為にも、保育所の一時預かり等も勧める時代になってきましたが、このような柔軟な対応は、ごく最近の事です。十数年前は、子どものお迎えにくるのに、早く会いたくて、バス停から走ってきて、“ただいまー”と抱き合う姿は、そう珍しい姿ではなかったのです。ですから、自分の休みの日に、我が児と過ご

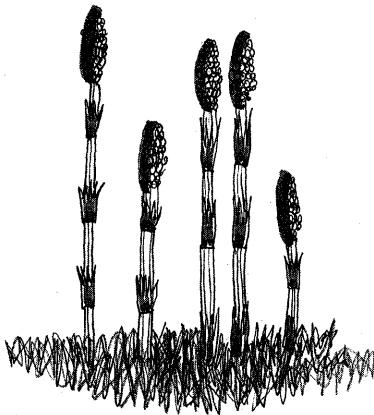
す事は、人に言われなくても当たり前のこと、という受け止め方を、多くの方がしていました。ここにも時代の流れがあります。

育児休業中で、母親は在宅しているけれど、夏休みの無い子がいました。「この子には、集団生活の方が必要なのです。」と言い切るのです。しかし、夏の疲れの心配、親とのスキップの必要性と言われる事は、我慢がならないが、保育者の労働条件の為に協力してくれ、という話なら理解できるし、担任の先生の休みの日は、休ませてもいい。でも、決して子ども為になんて言わないで欲しい、と言われた事がありました。保育者が投げかけられた新しい母親です。保育者が、その子の情緒的な状態が、親との関わりを深めた方が良いと判断した必要性から、あえて申し出た事でした。子どものサインの読みとりが、母親と保育者と違っていたというだけでなく、信頼のおける保育所なら、親と過ごすより幸せなのだという、親の価値観が大きく違っていたようです。保育所もずい分と期待

されたものです。確かに期待されるべく、保育所もより改善していく努力はしています。

例えば、乳幼児期に、いろいろな保育者に変わる事は、子どもの人間関係を築く上で良くないという検討で、担当制や持ち上がり制にしたり、大人の休みの代替も、いつも同じ保育者が入る体制を取り、子どもの成長にとって何が必要かというサイドで真剣に取り組んできました。又、食事も、保育所は、○歳児三人に保育者一人という、都基準がありますが、その中でも大人の動きを整理して、イスにしっかり安定して座り、スプーンで自分でもすくい、保育者の補助の二スプーン（子どもと保育者がそれぞれスプーンを持つ）の日まで、保育者に抱かれたり、イスに座っての一对一の食事に行っています。保育所というと、一斉に何かする、という流れを連想されるかもしれませんが、それは昔話になりつつあります。一人一人朝の勤務時間も異なるわけですから、その子の朝の家庭での生活リズムを考慮して、昼食の食事時差が出てくるのは、当

然の事です。そういうわけで、二歳児クラスになって
も一斉に食事に入ることはありません。月齢が低くて
早く空腹になり眠くなる子たちから担任の保育者と食
事に入っていきます。ただ子ども達は、生活の流れを



よく把握しているので、大人の都合で、食事のタイミングを大幅にずらさないように、家庭にも協力はお願いしています。

これらは部分的な紹介ですが、いつも子ども達が、より快適に、じっくり遊べたり、健康に過ごし、一人一人の個が守られる環境づくりに保育者が日々努力している事は、確かなことです。しかし、どんなにりっぱな、胸を張れる施設があつたにしても、それは、父親母親の存在にはなれないのです。そして、一生共に生きていくわけにはいきません。

親になつても、髪振り乱したりせず、すてきな生活を楽しめる事は、素晴らしいのです。ただ、はいはいしかできない子でも、よちよち歩きの子でも、仲間入りした楽しい生活にして欲しい、成長して少しは忍耐力のついた大人の方が、小さい仲間のゆったりとした歩みに、人生のほんのわずかな日々を、歩調をあわせて欲しいという願いがあります。子どもを、年末ベビーホテルに預けて、海外で遊ぶなどという話は、

ちょっと首をかき上げてしまいます。それが本当にリッチな時代の話の内容でしょうか、はたと考えてしまいます。保育者と親と、二人三脚で育児をしていきます。保育者と親と、二人三脚で育児をしていきます。しょう等と良く言いますが、実質はもっと親の占める比重は多い筈です。保育所は、全面的に、子育てを引き受けるわけではないのです。

乳幼児期の子ども達と今までたくさんおつき合ひしてきましたが、自分を愛し、気まぐれでなく、いつも育んでくれる人を大好きになってくれます。子どもとの愛情関係というのは、本能としてあるものだったり、天から降ってくるものでなく、一緒に、目の前にしっかり立ち、見つめ合い、育児する事で、しっかり根付くものではないか、という気がします。

ある父親の体験です。生後四か月になろうとする頃、母親の短期入院という事態になりました。自力でやりくりする事になりましたが、それまでは、ウンチといえは母親に、ミルクといえは母親に、と任せていた生活が、一転して、一人で全てを引き受ける事になっ

てしまったのです。不安というより、次々と追われる育児行為、家事の忙しさで、つい自分の夕食を食べるタイミングを逃し、夜中になってしまった事もあるそうです。そんな日でさえ、泣かないで眠ってくれた娘の寝顔に、幸せ気分を味わったり、こんな大変な事態に、良い子でいてくれ父親の慣れない育児で我慢してくれる、と嬉しく感じたり、便性の良し悪しの判断がつかず保育者に相談したり、と娘との数日の生活で、娘への愛しさが増していく様子が感じられました。日中は、保育所でのいつも通りの生活があり、こういう時は、本当にお役に立てるし、相談相手にもなれる所です。やはり、一緒に汗まみれで子育てすることで、親としても育っていくのだな、母性、父性は、理念としてだけでなく、共に見つめ合い、肌に触れ合い、汚れ合い、泣き笑いし、深まるものではないかと思えます。ですから、便利でも、人まかせにすぎないで、子どもと生きる時間を、もっともっと持つ努力をする事が、親子相互にとって必要なのだと思うのですが、

いかがですか。

保育所の保育時間は、けっこう長いものですから、睡眠、食事、排泄といった生活部分の占める割合も多くなります。今保育者の悩みの一つに、子どもの睡眠の問題があります。○歳児クラス位でも、夜の入眠時間が遅いケースもある位ですから、午睡だけをとらえず二十四時間の流れで、どう十分睡眠をとれるだろうか、どのクラスにも悩みはあります。一歳児ですが、午前中遊べる元気も無く、ぼーっとしているので、食事に十時半には入ったのですが、十分食欲を満たす前に、限界になり布団に入り、三時間以上眠り、やっと元気になりました。その子の昨夜の生活を見ると、翌日この様な状況になる姿を、予測できるものでした。家族でカラオケBOXに出かけ夜遅くまではしゃいだのでした。保育者は、親にその日の子どもの様子を話し、夜の睡眠は、きちんと考えて欲しい旨伝えたところ、「カラオケは、家族の触れ合いの場なのです。親子のつき合い方にまで、口を出されるのは、ブライバ

シーの侵害です。」と、逆に叱られてしまった事がありません。

親との対応は、本当に難しい課題です。先生、という立場で上から物を言っただけは、聞く耳さえ持たれないでしょう。相手が、一歳児を深夜まで刺激の多い騒音の中で、遊ばせていけないのは何故か、疑問を持つきっかけを作り、理解し、結論を自分の力で引き出してくるまで、保育者はじっくり関わっていく事が要求されてきます。保育者は、多少は大脳生理学とか小児の成長に関しては、学びつつ仕事をしている筈なので、相手との共通理解のできた言葉で、納得のゆくまで、持っている知識は伝達していく義務があります。でもこんな断片的知識を学校で習わなかった筈の昔の人が「早起きは三文の得」とズバリ諺で言ってるのですね。時には理屈をこねまわすより、こんな諺でざっくりばらんに話す方が効果がある事もあるでしょう。りっぱな理論でも、親との信頼関係がなければ生きてきません。自分と全く違った価値観を持つ親とも、あ

せらず、あきらめず向かい合う強靱な精神力が要求されています。でも、担当児との出会いを思い出すと、さほど親との対応も難しくはなくなりました。赤ちゃんの一つ一つの仕草、泣き声が何を求めているのか、手探りでいろいろ感じやってみます。すぐに反応がなくても、見つめ合い、あやし、語りかけます。日毎に、その子の合図が迅速に理解できるようになっていきます。こうした努力を、相手が大人でもすればよいのだな、と思うと、手の届く所に相手が見えてきます。パターン化した対応ではなく、一人ずつ違った顔を持つ親に、柔軟に対応できる保育者でいたいと思います。その為には、親にも、保育者にも、もっとゆとりが必要で。余裕は、豊かな発想を生み、相手への許容範囲も広がります。

(立川たんぼ保育園)